

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洸善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？」
- こどもの物語と聖書に見られるくしょうがい者>差別-
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなにに人? - 間(はざま)から読む聖書-」
(金 永秀)

目 次

生きるということ.....	小嶋 博(2)
あなたが必要だから	木下 忠司(5)
敬神愛人の高校教育から学んだ謙虚さ	渡辺 育(9)
クリスマスの光	西村 清(12)



生きるということ

小 嶋 博

私はクリスチャンではありませんが、「神を敬い、人を愛する」ということはどういうことであるか・・・大学に来てもう35年になりますが、その間色々とそのことについて考えておりました。神を敬うということは、ただ教会でお祈りをするだけでいいのだろうか？ただそういうことだけでなく、また違った意味があるのではないかなどと考えておりました。今日も高校生が自殺したというニュースが、インターネットで出ておりました。このように昨今、若い世代の人たちが、次々と自らの命を絶つという出来事がたくさん起こっております。その中には、いじめに遭っている人もおります。そういう人たちは「自分が、この世の中に一体何の目的で生まれてきたのだろうか？」というようなことをきくと、よく考えていたと思います。でも私は、この世に生きる意味を考えると、一番重要なのは“神を敬う”ということではないだろうかという思いに至っています。

本日例を挙げて話す方たちは、クリスチャンではない方ですが、お二方の生きた壮絶な人生を、皆さん方にご紹介したいと思います。一人目は6年ほど前に、本学の商学部へ経営者講演に来ていただいた“CoCo壱番屋”というカレー

チェーンの創立者、宗次徳治さんです。52歳のときに社長を辞任し、奥さんに会社の全てを託しましたが、奥さんもその3年後に辞任され、現在はボランティア活動に専念しておられます。高校時代、アルバイトとしてそのカレー屋さんで働いていた当時の青年が、現在の社長となっております。先日会社を訪ねましたところ、本学の卒業生が専務と常務に就任しておりました。今や全国で約2000店のチェーンを持つという大きな企業に成長しております。その初代社長であられる宗次さんを紹介いたします。もうお一方は、大平光代さんという女性についてお話いたします。大平さんは38歳で大阪市の助役になりましたが、40歳で辞め、現在は弁護士をされています。「いのちのホットライン」という相談機関を開設し、また2000年には出版した本が年間ベストセラーになりました。「あなたも、生きぬいて」という本です。

このお二人は私の中では物凄く印象の強い方なので、たった10分間で語りつくせるか分かりませんが、それぞれの生き様を紹介させていただきます。こういう風に自分自身というものを見出して、自分の生き方というものを見据えて未来に向かって生きていくという

ことが、“神を敬う”ということにつながっていくのだと思います。

まず大平光代さんはどういう方かと申しますと、皆さん聞いて大変驚くと思いますが、背中には観音様と竜の刺青が彫ってあるという女性であります。彼女は中学2年の時にいじめに遭いました。それを苦に河川敷で割腹自殺したのです。包丁で3回突き、それは臓器にまで達するほどでした。たまたま通りすがりの人に助けられ、病院に運ばれ一命を取り止めました。退院して中学校に戻りますが、再びいじめに遭い、卒業はしませけれども、中学の3年生時に暴走族に入ることになります。そして、極道の妻になり、22歳で離婚いたしました。その後、大阪の北新地のクラブで勤めました。そのときにたまたま父親の知り合いがお客として来たとき、「おまえは親にも音信不通で一体何をしているんだ！」と色々と諭され、彼女はその知人男性に世間の恨み辛みをすべて打ち明けたそうです。その知人男性は彼女の話じっくり聞いてくれ、そしてこう述べたそうです。「結局、お前は世間に負けているのだよ。そんなに悔しかったら仕返しをすればいいじゃないか。」つまり、世間がびっくりするような人間になればいいじゃないか、というアドバイスをしたのです。それで彼女は心を改め、その男性の養女になりました。いわゆる、22歳から本格的に自分が世の中で生きていくためにはどうしたら良いのだろうか？ということを考え、彼女はそこから勉強

を始めたそうです。しかし、書籍を読んでも、あまり漢字が読めませんでした。彼女は自分の足をテーブルにくくって、一つ一つ漢字に振り仮名をうち、猛勉強をしたそうです。それで23歳で宅建の資格を取り、24歳で司法書士の資格も取得しました。そして、27歳で通信の近畿大学法学部に入学しまして、ちょうど3年生になった頃に一発で司法試験をパスし、弁護士登録をしたということです。実にびっくりするような人生ですね。16歳で結婚するということも、未成年ですから、結婚の承諾書に親から捺印を貰わなければなりません。それで、親ももちろん中々押印しないでいると、「何やっているんだ！」と父親の肋骨が折れるくらい蹴ったのですが、父親はほとんど抵抗もせず、遂に判を押したのでした。父親の他界後、彼女がその当時の出来事を振り返り、母親に「何であの時、お父さんは判を押したの？」と尋ねたそうです。父は娘について、「光代は自分の娘だ。判を押さなかったらまた割腹自殺をして、今度は本当に死ぬかも知れない。例えば刺青をしていても、生きていてほしいと思ったから判を押したんだ。」と語っていたそうです。そのときに彼女は初めて、当時の父親の自分に対する心境を知り、涙が止まらなかったということです。こうして現在、「いのちのホットライン」という機関を立ち上げ、いじめに遭っている人たちを助け、弁護士としての活動も並行して続けているということです。

また彼女は、高齢出産でダウン症のお子さんを授かり、その子を大事に育てながら、現在もさまざまな社会活動をされておりす。非常に真似できない人生を歩まれてきた女性であります。

さて、宗次徳治さんという方は、本当の自分の名前についてご存知ないそうです。彼は孤児院の前に捨てられていたそうです。そして孤児院で助けられ、子供が出来ない若い夫婦に1歳半の時に引き取られて、養子に入った家が宗次家だったのです。ところがその後、その若夫婦は離婚してしまいました。そして、残った男性に育てられたのはいいのですが、その父である男が全く仕事をしなかったために、彼の家には電気もなかったそうです。家を変ったのは25回にもなります。講演に来ていただいたとき、商学部の学生さんに「当時の私より貧乏な人はここに居ないですね？皆さんは勉強しようと思っただら電気がつくでしょ？私はろうそくで勉強しておりました。」とおっしゃっておられました。家賃を払えないから何度となく家を追い出され、電気も消され、そのような状況でありましたが小牧高校まで進学し卒業され、26歳のときに出会った女性と結婚し、その女性が食べ物屋さんをやりたいと希望し、始めたのが喫茶店でした。その喫茶店は全くお客が入らず儲からなかったので、喫茶だけでは難しいと思い、何かしなければと考え付いたのがカレーでした。それがCoCo壱番屋の前身であり

ます。「自分は何も出来ないの、その店の掃除ばかりしていた。」と彼は当時を振り返っていました。その彼の長所は“自分にめげない”ということでした。「自分だってどこか良い所があるんだ。頑張っていれば必ず芽が出るんだと、これまで一生懸命頑張ってきた。」ということをお話しておりました。

この方は若い人たちを育てるということが好きで、現在それに携わるボランティア等で活躍されておりす。就職が中々決まらず、CoCo壱番屋の前身となった喫茶店に、「就職が決まるまで働かせてください。」と、アルバイトとして働き始めたその男性が、現在の社長となっています。「人間というものは本当に分からないものですね・・・。」と述べておりました。どこに才能を持ち合わせているか、またその才能がどこで開花するかも分からないのです。私はその方たちの経験を聞いて、「敬神愛人」ということは、“我々がこの世の中に果たすべき何かの使命をもって生まれてきている”ということを示している言葉だと思います。自分で自分を諦めてしまうのではなく、自分に無限の可能性があるということを信じる・・・そのことが出来て初めて、我々は力を発揮できるのではないのでしょうか。そういった意味を含めて、今日紹介したお二方はクリスチャンではありませんが、彼らは私たちに模範的な生き方を示してくれた人たちではないかと思います。

(こじまひろし 学長 2008.4.24 カレッジアワー奨励)

あなたが必要だから

木下忠司

ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとすることを見て、施しをこた。ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。その男が、何かもらえんと思つて二人を見つめていると、ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」そして、右手を取つて彼を立ち上がらせた。するとたちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、躍り上がつて立ち、歩きだした。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入つて行った。民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た。彼らは、それが神殿の「美しい門」のそばに座つて施しをこたっていた者だと気づき、その身に起こつたことに我を忘れるほど驚いた。

(新約聖書 使徒言行録 3章1～8節)

私は岐阜県中津川市の坂下というところから来ました。木曽川沿いの人口約5000人の小さな町です。そこに坂下教会があつて教会員は20名と満たない小さな教会です。私が住んでいるのはそこから更に10キロ北へ行った所、も

うその先には山しかないという、猪も猿も狐も普通に出没する信号が一つもないような村でひっそりと暮らしております。こうやってたまに名古屋に出てくると、人や車の多さにびっくり慌てふためいて、今日は少々どきどきし

ております。それでは少しお話をさせていただきます。

ドキュメンタリー作家であり、映画監督でもある森達也さんという方がいます。オウム真理教の信者たちのドキュメンタリー映画を撮った方で、本もたくさん書いておられます。今の社会に対して鋭い批判もしておられますが、その森さんがこんなことを言っておられました。「宗教を必要とするのは人間だけだ。なぜなら、あらゆる生き物の中で人間だけが自分たちがいつかは死んで消滅することを知ってしまったから。これは怖い、いつかは絶対に消えるのだと。だからこそ人は、死への恐怖を緩和する装置としての宗教を必要とした。遺伝子に刷り込まれたのだ。世界にはさまざまな宗教があるが、天国や極楽浄土、輪廻転生など死後の世界を担保する機能についてはほぼ共通している。」

この森さんの見解は、宗教に対してかなりの的をえているなと思いました。人間が信仰や信心を持つにはさまざまな動機があると思いますけれども、突き詰めて考えていくとここに至るのではないかと思います。“死の恐怖への克服”ということです。絶対に間違えなくやってくる出来事、そして死後の世界は誰も分からないということです。これは私たち人間にとって、とても怖いことではないでしょうか。だから死の恐怖を緩和するために、宗教という装置を人間は作ったということです。皮肉な言い方をするならば、この森さ

んが言われるように、宗教を広めるためには死後の世界を担保する・・・つまり「信仰を持てば死後の命が保障されますよ、大丈夫ですよ」と魅力的に伝えればよいということです。逆に、信仰や信心がなければ「地獄へ行きますよ！滅びますよ！」と言えればいいわけです。よくいわれるカルト的な宗教というのは、この辺を上手くおさえているので人はどんどんなびいていくようです。しかしイエスという人も、また今日の聖書箇所に出てくるペトロやヨハネという人も、この死後の世界を保障したようなことを言ったり、あるいは脅したりということはしませんでした。では何をしたのか？そのことがここに書かれてあります。

先ほど読みました聖書の箇所ですが、ペトロとヨハネというイエスの二人の弟子たちが、エルサレムの神殿へやって来ます。すると、ちょうどそこへ生まれつき足の不自由な男が運ばれて来ました。この男の目的は、神殿の境内へ集まる人に物乞いをするることでした。彼にとって最も大切なことは、いかに多くの施しを受けるか、俗っぽい表現で言えば、いかにその日の日銭を多く稼ぐか・・・ということでした。それには、どれほど自分が憐れであるか同情をかうよう振舞えばいいのです。また彼からお礼金をもらっているであろう、その運んでくる者たちからすれば、この男の足が治っては稼ぎにならなくなるから困るわけです。この足が不自由な男も、このような生き方しか出来な

い自分を諦めていたのでありましょう。

二人の弟子たちはこの男のそばにやってきて、ペトロがこう言います。「私には金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり歩きなさい。」すると男は立ち上がって歩き出したということです。この記述が本当だったかどうかは分かりません。また、この時ペトロは本当に金や銀を持っていなかったのでしょうか？そんなわけがありません。神殿に行くということは、お賽銭としてのお金を必ず持っていくわけですからいくらかは持っていたはずですが。でもペトロはこの男にお金をあげようとは考えていなかったのです。なぜ彼は男の期待に応えようとしなかったのか・・・むしろ、ペトロはそうしようとは全く思わなかったのです。なぜならこの男が人生を投げっていた、また周囲に利用されているだけの日々を送っているということをすぐに悟ったからです。確かにその男は、自分のそのような生き方に慣れきってしまっていて、すっかり人としての尊厳を失っていたのです。もしペトロがお金を差し出して施しをしたならば、あるいはそこを通り過ぎたのならば、この男の人生はこの先何も変わらなかったはずですが。ペトロはすぐそう気づき、お金を差し出す代わりに別のものを彼に与えようと言います。

「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり歩きなさい・・・。」これはどういう意味なのでしょうか。

単なる呪文なのでしょうか？文字通りイエス・キリストの名によって立ち上がりなさいと言ったら立ち上がれるのでしょうか？私は思うのですが、ペトロはこの男を見た時、かつて自身がイエス・キリストに出会い、ついて行った時のことを思い出したのではないかなと思うのです。ペトロはこの男のことをじっと見つめながら、この男と当時の自分とを重ねていたのではないのでしょうか。また「私を見なさい」と言った言葉には、今の自分はその時の自分とは違うのだという意味が込められていたと思うのです。このペトロをはじめイエスの12人の弟子たちというのは皆、イエスに声をかけられてついて行った者たちです。でも彼らが優秀だったからではありません。あるいはお金持ちだったからとか、立派で身分が高かったからとかそういうことではありません。むしろその逆だったのです。貧しくつまはじきにされた、うだつのあがらないような者たちばかりだったのです。でもイエスはそのような彼らに、ついて来なさいとおっしゃったのです。イエスが人を招く理由というのは一つです。それはその人が必要だからです。イエスの名によって立ち上がりなさいという呼びかけが持っている意味は、「あなたはこの世の中にとって必要な人間なのだ、人生を投げ出さなくてもいい。価値がある存在であるから自信と誇りを持って！」ということではないのでしょうか。

今の時代、色んな分野や場面の中で

不条理で、人の尊厳を平気で踏みにじるようなことが起きていると思います。また人間一人一人の心もそうなっていると思います。「あなたは必要なのです。価値ある者なのです。誇りを持って、胸を張って生きていいのです。後ろ指を指される必要なんてないのです。」

馬鹿にされる必要もないのです。起き上がり歩きなさい。」そう声をかけてくれる存在がこの世界のどこかに必ずいてくれるということ、また私たち自身が人に対してそうでありなさい、と神がペトロの働きを通して私たちに示されたのではないのでしょうか。

(きのしたただし 坂下教会牧師 2008.6.24 チャペルアワー奨励)



敬神愛人の高校教育から学んだ謙虚さ

渡 辺 斉

私はクリスチャンではありませんけれども、名古屋学院大学の系列校である名古屋高校の出身で、そこでも「敬神愛人」をモットーに教育を行っておりました。高校のときは、毎週、全校生徒がチャペルに集って讃美歌を歌い、授業でも一時間の宗教の時間があって、お話を先生方から伺っておりました。そこで色々なことを学んだのですが、私の高校生活で学んだことを一言でまとめて言えば“謙虚である”ということでした。それは自然に対して、あるいは人に対して謙虚であるということです。それが私なりの解釈でいえば「敬神愛人」につながるのではないかと思います。

私は高校を卒業し、大学を出て朝日新聞社へ就職いたしました。そこで長年働き、定年直前にこちらの大学にご厄介になるということになりました。実は新聞記者というのは謙虚でないと何事も務まらないのです。新聞記者の取材する相手のほとんどが、自分よりもその道の専門家であります。学者のところへ取材に行けば第一級の学者が相手であり、生半

可な勉強では到底追いつかないわけです。だから、自分が生意気な気持ちでいると何もそこから吸収できなくなります。新聞記者の仕事は、そういった学者たちが研究している専門的な内容取材し記事に書くといった流れで行います。学者だけでなく一般の方の取材ももちろんあります。職人さんや家庭の主婦など色々な方々取材しましたが、その人たちも記者より専門家です。主婦であれば家庭のことについては、私よりはるかに専門家であるのです。こういったように、どこへ行っても専門家相手なのです。こうした状況に置かれると、自分がいかに力のない存在であるかということを実感しておかないと取材できなくなります。私はそんなとき、高校で学んだ“謙虚であれ”ということをモットーに取材をしておりました。

記者として私の専門分野は水問題や環境問題などで、世界各地に出向いて取材を行っておりました。例えばスリランカに行ったとき、マハベリ川というスリランカで一番長い川がありました。そこには巨大なダムが、

かつてこの国を植民地に使っていたイギリスの手で造られておりました。ヴィクトリアダムと言います。しかし、そのダムは全く役に立っておりませんでした。つまり、そのダムは水が地中に染み込んで満足以貯水が出来ないといった状況にありました。“役に立たないダム”ということで国際的にも有名なダムであります。スリランカでは、古代の2000年前から水を大事にしようということで、たくさんのため池が何万箇所も造られました。でもイギリスの植民地時代に、そんなため池は役に立たないと放棄され、代わりにダムが計画されてきたのです。私がヴィクトリアダムに取材に訪れたとき、そのダムの水没地で生まれ育ったという、日本でいえば農林水産大臣に当たる大臣が、「先進国は非常に傲慢である」ということを述べておりました。それはほんの一例ですが、人間が“近代技術を用いれば自然に対して何でも出来る”という傲慢な意識がそうさせたのではないかという気がいたします。

イランからアフガニスタン、そこから中国の新疆ウイグル自治区に行きますと、2000年前からの水利施設があります。乾燥地帯で4000メートル、5000メートルの山から水を地下トンネルでオアシスまで引いてきて、その水で小麦を作ったりブドウを作ったりしています。そのトンネル式の水利施設は、イランでは「カナート」、アフガニスタンや中国では「カレー

ズ」といわれております。こういう施設は古代の人たちの血と汗の結晶で造られた施設であります。イラン・イラク戦争、ソ連とアフガニスタンの戦争などでこれまでたくさん破壊されてきました。それでもいくつかの地域で、中国の新疆ウイグル自治区のブドウの大産地であるトゥルファンが有名ですが、今でもかろうじて残っております。そのブドウに注がれる水というのが天山山脈という5000メートル級の山から地下トンネルを通して引かれています。その地域の方とお話して非常に感じるのが、彼らは自然に対してとても謙虚であるということです。

ところが近代になって、古い地下トンネルは破壊され、新しい機械井戸やダムなどに取って代わるようになりました。そうした近代技術への過信が招いた悲劇があります。

インドからバングラデシュにかけては、WHO(世界保健機関)の勧めで、大量の井戸が掘られました。ところがその井戸の水を飲んでいる何千万人という人たちが有毒のヒ素汚染にさらされております。水の中に天然のヒ素が含まれていることに気づかなかったのです。これは国連機関が推進した政策でした。井戸水はヨーロッパでうまくいっているからアジアでも大丈夫だ、という思い込みがそういう悲惨な結果を招いてしまったのです。近代の技術とか知識によって人々が傲慢になってしまったのでしょう。

現在は、世界各地で水問題や環境問題が山積しております。冒頭の話に戻りますが、自然や人間に対する謙虚さを失わないということは、多くの場所

で最も求められていることではないかというふうに、「敬神愛人」を学んだ経験の中から改めて痛感しております。

(わたなべひとし 商学部准教授 2008.5.22 カレッジアワード奨励)



クリスマスの光

西村 清

そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」

天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

(新約聖書 ルカによる福音書 2章1～20節)

クリスマスシーズンのこの時期、多くのところでクリスマスが祝われていると思います。そのため町に出かけますと、明るい光でいっぱいであります。最近では、仏教系の幼稚園でさえ、クリスマスをきちんとやらないと、保護者の方々から不満が出るといった状況であります。中には、「教会でもクリスマスをやるのですか？」と質問される方もおられます。

でも“クリスマス”という言葉は知っているけれど、ほんとうの意味があまり分からない、という方が多いと思われます。それゆえ皆さん、名古屋学院大学に入られて聖書に出会いクリスマスの時期にクリスマスに関することを聞くということは、大変貴重な経験になると思います。

今年、教会では11月30日の日曜日の礼拝からアドベントに入りました。アドベントというのは、イエス・キリストの誕生を待ち望む時期のことを指して言います。その日からろうそくが毎週一本ずつ灯され、クリスマスの日には、4本のろうそくがそろって灯されるという習慣になっています。これは、単なるアクセサリーではありません。暗闇を照らす光としてこの世に降臨されたイエス・キリストを待ち望む、ということを表わしています。と言いますのも主イエスの誕生の時代のことを振り返りますと、その頃の社会はとても不安定で、不正が横行し、極端な貧富の格差があり、どんなに働いても生活が楽にならない人々が多くいました。

人々が不信に固まり社会状況に希望を持てない時代に、イエスの誕生があったわけです。神のひとり子であるイエス・キリストが、人となって現れたのです。私たちはそれがどのようなことであったのかを聖書の記述を通して想像するしか方法はありませんが、しかし救い主がお生まれになったという喜びは、確かなこととして私たちに伝わってまいります。

さて、クリスマスは夜と密接に結びついていると言われています。聖書を通して語っている夜というのは、単なる夜ではなく、真夜中にふっと目を覚まし不安を覚える、あるいは目の前が真っ暗になって、どうしていいか分からないような、“自己の不確かさ”や“不安な人生”ともいうべき不条理に目覚める・・・そういう夜でもあります。クリスマスの日に登場してくる人々を見ますと、それぞれに夜を背負った人々であることがわかります。その一つとして、マリアとヨセフの夫婦の体験がありあます。結婚前に子供が出来た男と女、聖霊によって身ごもったとは言え、一体なぜこのようなことが起こるのかという夜を背負っていたのが、ヨセフとマリアでした。身に憶えのない子供を身ごもるということは、二人にとって、大変ショックなことでありました。私は今まで、いろいろな結婚式場で司式をしてまいりました。最近では、身に憶えのある子を授かって一緒にいるといった、“出来た婚”のケースが割合多くあります。しかし、このヨセフ

とマリアは、身に憶えがない子供を授かったことを運命だと考えるのではなく、“神の摂理”、また“神の計画”であると考えたのです。これは、信仰者の一つの姿勢だと思います。しかし、この時代の現実は大変厳しいものでした。ユダヤ社会では、姦淫をしたことによって子供を身ごもれば、石打ちの刑で殺されたのです。そのことが旧約聖書の申命記に記されています。二人は婚約しておりましたが、そういった段階で子供ができるのは、石打ちの刑の対象であると言われていたのです。ですから、マリアは大変不安を抱いておりました。その闇のような出来事が突然、愛し合う二人を襲ったのです。二人はこの不条理な出来事に、初めは大変な怒りと悲しみを抱いたと思いますし、なぜ私たちが・・・と思っていたことでしょう。

では、先ほど読んだ聖書箇所に登場した羊飼いたちはどうでしょう。つまり、彼らは社会の底辺にいた、貧しい人々であります。その当時のファリサイ派といわれる人たちは、羊飼いを罪人とみていたようです。裁判で証人に立つ権利さえもない、いわば、人間扱いされていない存在であったそうです。羊飼いは、毎日追い立てられるような、羊の番をしても楽にならない生活、精神的にも肉体的にも、常に圧迫された立場の人たちでありました。その意味で、彼らも同様に、人生の闇夜を背負っていたと言えます。

更に、マタイによる福音書2章には、

占星術の学者たち（博士）が登場してまいります。彼らは、イエス・キリストの誕生に立ち会います。旧約聖書を見ますと、東は問題の場所であるとされてきました。最初の人間であるアダムとエバが、罪を犯して追放されたのが“エデンの東”であった、ということに由来しており、また聖書の中にあるお話しで、弟のアベルを殺した、兄のカインが追放された場所も、同じエデンの東“ノドの地”というところがありました。あるいは、人類の壮大な寓居と言われるバベルの塔が建てられたのも、東の“シンの地”でありました。つまり、東は神に対して罪を犯したものが追放される方角で、人生につまずいた者が、やむなく逃げなければならない場所であったのです。3人の占星術の学者は、この東に住んでいました。と言うのも彼らは、ユダヤ人が嫌っていた異邦人だったのです。職業の星占いによって、人間の運命を理解する運命論者と言われる人々でもありました。自分たちは、悪い星の下に生まれたのだから仕方がない、諦めよう・・・そのように考えていた人々でした。

私たちが、人間関係の中で不安や不信を抱き、人生の不条理さや不運に泣き、自らの存在に諦めと絶望を感じるとすれば、私たちもまた、このクリスマスに登場する人々らと同じ、夜を背負ったものと言えるかもしれません。しかし不思議なことに、クリスマスの光や喜びは、このような人々に、先ず

もたらされ、告げ知らされたのです。そこに、計り知れない神の愛があると思うのです。ヘロデ王や王国の人々ではなく、ヨセフとマリアを器として用いられたのです。人口調査を命じた当時の皇帝アウグストゥスではなく、羊飼いたちに喜びが告げられたのです。クリスマスの光はいつも、人間の常識を打ち破って、意外なところにその光を輝かせるのです。しかも、この光は飼葉桶の赤ちゃんに象徴されるように、実に小さく、弱々しい光ではありますが、私たち人間を内側から照らし、自分が生きることの意味や、価値を見出すことが出来るよう、導いてくれるのです。

ヨセフとマリアは、相変わらずユダヤ社会の中で、暗い夜を背負って、生きていかなければなりませんでした。しかし、この出来事の後、二人にとって一度与えられた“光”は、夜の闇の中でであっても、確実に自分たちの存在

を支え、導いてくれるものであるということが分かったのです。二人はどのような困難に遭っても、生きていくことが出来たのです。羊飼いたちも同様です。生活の貧しさや、人々から受ける差別は、クリスマスの後も、全く変わることなく続きますが、彼らもまた、クリスマスの光に照らされることによって、その困難の中で生きる力が与えられたのです。

さて、皆さんの今年のクリスマスは、昨年や一昨年のクリスマスと同じものでしょうか？それとも、ヨセフやマリア、羊飼いたちのように絶望や不信の中にあっても、苦しい現実から逃げないで立ち向かい、生きる希望を見出せる、今までとは違うクリスマスへと変えることが出来るのでしょうか。今年のクリスマスが、皆さんにとって、生きる希望を与える光となって欲しいと願いつつ、皆さんの上に祝福をお祈りいたします。

（にしむらきよし 日本キリスト教団中部教区巡回教師
2008.12.16 クリスマスチャペルアワー奨励）

